

がありますし、また石野新蔵の知久平城をこわした時の文書、
知久平御城趾之後、道昌^{平沢豊前守}異見次第本作へ相渡、可為如前々者也、
仍如件、

十月十二日

石新 光之(花押)

というのが残っていますから、この十月十二日は天正十五年と考
えられるかとも思います。天正十一年から天正十五年秋まで定利は
知久平に居城し、知久氏が亡びるに及んで飯田城に移り、天正十八

大草城

寛政元年大草村明細帖古城跡の項に「是ハ山城ニ御座候、東西三
町程南北一町程、三方堀一方山ニ続候、只今ハ畑ニ成御縄地ニ而御
年貢上納仕候」とある。

村内はもとより一般の文獻にもこの城で戦斗のあった記録はない
一説には香坂高宗が宗良親王を奉ずるに大草では小笠原勢に攻略さ
れ易いので大河原に移って守ったともいう。

とある。しかし正平年度一三五〇前後から文禄年度一五九三前後
までおよそ二四〇年前後間の客観的史料を欠くので確たる信憑性の
裏づけがないのを遺憾に思う。

大字大草のうち町と間柱の間を西流して天竜に注ぐ深沢川(南)
と牛落の洞(北)に挟まれた台地の突端小字古城に大草城址があつ
て豊郭、濠地等を現存している。平山城の規模を存しているが土塁
は畑に均されて残っていない。

南に跡場、殿墓、東南に天神山常泉寺と導場、東に荒町・北町・
中町・南町、東北に出張、やや遠く西北に殿垣外馬場、東に遠く鳥
屋場、矢平間遠、大河原に通う鹿養などの地名を持つている。

ふだんの居館は城址の北方約五百米、沖田(御北)御館、今の高
坂家で東と北に石塁をめぐらし南と西は谷と窪地になっている。

高坂氏系図によると滋野氏の後胤で海津城主高坂彈正少輔昌信を
祖とし、高坂昌信の墓は松代にあると共に高坂家でも菩提を葬って
いる。

明治十一年八月明治天皇長野駐蹕の御天覧に供した高坂謙輔の説
明書に

高坂昌信の三男右近介宗澄の孫五郎右衛門宗久居を大草に占め農
となりしより子孫継続今に至る。家に鎧冑及此指物を伝う、

とある。文政八年信玄の法事、長篠戦死二百五十年忌法要が甲州
恵林寺で催されたとき使者が来て招請され高坂源一郎宗景が列席、

年八月上州へ所替えまで飯田城に在城したのかと思います。尚、飯
田城へ移った理由は下久堅上虎岩から知久平城内はがら見えに見え
るので、飯田へ移ったという伝説が残っていますが、これは江戸時
代後記のつくり話なのでありません。やはり武田氏が伊那郡を統
一して以後飯田が中心としてもっとも適当な地であり、下条氏が亡
びるのを待って小大膳定利も飯田へ移ったのでしよう。

(筆者 飯田市下久堅北原)

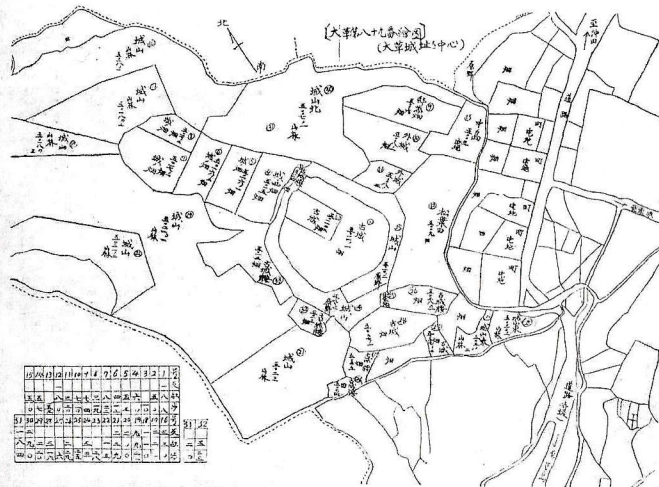
下平加賀雄

高坂清人家文書に 言つたこの事

一 むかし宗良親王様、信濃国伊那の大草の山里にかくれ去時、せ
んそもしたかい、よのおとすれ悪きゆへに、大かわらの深山に
御供いたし、立籠し末に、よろい旗ともたまはりて家のたから
に伝ひ、また後に子孫甲州武田家へしたかい申候

文禄七年五月

香坂 右近 印



板垣・高坂・小山田・秋山・馬場・内藤・山県・甘利の面々と同座

している。

大草庄三郎入道休斎にあてた北条氏直天正十年九月文書については伊那路八十九号口絵に小口珍彦先生が詳解せられているので、ここには省略するが、天正十年七月下条兵庫介頼安へ出した徳川への起請文は

大草休斎起請一紙
同家中衆起請一紙

に名を運ねているのは

片桐意釣西鎌 片切孫左衛門為義 片桐宗三 北村掃部左衛門
上沼右近 塩沢佐太衛門 新居萬助 大沢六兵衛 片切源三昌忠
橋都十郎左衛門貞綱 松平仁左衛門 南島与左エ門 米山彦七郎
宮下四郎左エ門光延 北原七左エ門定光
となっている。上伊那の南部下伊那の北部に亘る地の後に郷士、

帰農した人々と思料される。右近介が毛利秀頼の臣篠治勝次郎のもとに所の代官となつたのはその後のことで

大草山里申ノ年（慶長元年）御勘定之事

高一 貳千貳拾壹石八斗

物成 千貳百八拾壹百貳斗 出米共二

此内 五百拾貳石六斗一升八合 定りの大豆 残而七百六拾八

石四斗貳合米也（以下略）

右西ノ分御皆済也

慶長二年八月十日

その子仁兵衛の時、元和五年九月十八日、近藤の臣白崎宗兵衛と井上の臣大村平左エ門とが大草村わけ地二付而定之事という一札を出したものが同家に残っている。（信濃史料二十三巻口絵及び本文また信濃第十七巻二号）に今牧久さんが各方面の史料を引例されて山本近藤、今田井上の両旗本の伊那入封が元和四年という従前の説を一步進めて元和五年五・六月の頃であろうかと述べている。

現代生活に縁遠いのか灯台もと暗しのたとえの通り旧南向地区の人々で大草城址の所在を知っている人は十人のうち二・三人ぐらいであろう。そして城と言えは姫路の白鷺城や松本の深志城のような天守閣や櫓があつたものと思ひこんでいる。そうでないことや、その所在については却つて伊那史学会や上伊那郷土研究会の会員の方がよく知っている。

大草城址を中島といっているのはその地籍が内堀（今は田になつているか）を隔ててその中にある島の状をなしているからであろう村内には葛島のとりで、飯沼のわみ沢と手取沢間のあら城とこの大草城の三つがあつて、特にあら城の址に登つたものは数えるほどしかない。伝える所によると船山城のとりで葛島岩は小規模ながら殆んど原型のままで土塁を西と北に残している。伝によると城主米山内蔵之助は秋山信友に属し岩村城に討死、また片桐安芸守正保は天正十年武田信繁に属し大島城に参じていたが戦死したとある。

大草城は香坂、任名を以て時に大草を名乗つたが、或は北条或は毛利・京極、或は下条・徳川と結城・上田など他に駆戦したという記録はあるが戦国の武將はこの竜東の地攻略の必要もなく、また堅塁でもなかつたであらう。

飯沼のあら城はのろし台というが背後に狼煙台として絶好の陣場形山一四五三米があるのでそうとは考えられぬ。むしろその対岸指

松尾城址

飯田市松尾地区と竜丘地区の間に一つの溪谷がある、名づけて毛賀沢という。この谷を挟んで二つの城址が相對して残っている。北にあるのは松尾城址で南にあるのが鈴岡城址であり、ともに小笠原氏に関する城でありながら、かなり衝突した歴史を持っている。

松尾城址は鼎町名古熊の台地が東に延びたその先端にあり、南は毛賀沢に面し高距一〇〇米に及ぶ断崖となっており、北は北の沢の深い谷によって切られた舌状台地に位置している。北の沢は別名つ

呼の間に飯島古城があるので、為公の第四子為実の孫飯沼太郎行俊とその子飯沼三郎資行の二代が籠るべき山城、山頂は東西一町・南北五十間の割平地で、平時の居館が飯沼平地田圃間にあつて天龍川満水の災を蒙り他へ移つたと考えたが之は筆者の独断で文献の徴すべきものはない。（筆者 中川村北林）

大沢和夫

ゞら沢と称した。地籍から言うところの僅かの部分が鼎町になつているが、大部分は飯田市松尾（代田耕地）であり、城址の麓が飯田市毛賀になつている。本丸址は飯田市松尾一〇八一番地である。

しかし、このような村境にあるので古い書物には色々と記されている。信陽城主得替記には「毛賀・長熊・駄科三ヶ村ノ境ナレドモ長熊ノ東方松尾ノ城迹ヲ古城村ト云テ高廿四石ノ御検地帳ニテ長熊村ノ内也」と記してある。

国道二五二号線迹の八幡町より重要文化財の神像を有する鳩嶺八